

選評

中村みのり

『芸術の日本』の表紙における図様の改変について

——一八九〇年前後のフランスにおける浮世絵受容——

本論文は、パリの美術商ジークフリート・ビングが、一八八八年から一八九一年に三カ国語（仏・英・独）で刊行した月刊芸術雑誌『芸術の日本（*Le Japon artistique*）』の表紙に着目し、その典拠を特定した上で図様の改変を具体的に考察した労作である。『芸術の日本』は、ジャポニスム研究において重要な資料であり、国内外の研究者たちによって検討されてきた一方で、収録された日本美術の作品については十分な調査が行われてこなかった。中村氏の論考は、その空隙を埋める意義深い基礎研究である。

本論文はまず、図録やデータベースを利用し、広範囲かつ丹念な調査によって、図様の典拠を明らかにする。全三六冊の表紙のうち二七冊分を特定しえた点は、本論文の特筆すべき功績である。判明した典拠のほとんどが浮世絵師の作品であり、本誌刊行当時にフランスで著名であった北斎と歌麿への関心が表紙の選定にも反映されていることが明らかにされる。画題の選択については、江戸で好まれた傾向とは異なり、花鳥画が全三六冊の半数以上を占め、人物像においても大首絵ではなく全身像が選ばれていることを指摘する。

典拠特定の結果、表紙の図様の多くが原作から改変されていることが判明する。本論文は、改変の諸相を詳細に観察し、それらを「結合」「削除」「反転」「補正」といった要素に分類して全体像を明解に提示する。さらに、改変の顕著な第十号と第五号の表紙を分析する。とくに後者の事例では、典拠となった作例における見立の趣向が理解されなかったからこそ生み出された改変とその意味が考察される。

表紙での図様改変の背景について、中村氏は『芸術の日本』に収録されたビングの言説を紐解きつつ、単なる日本美術の紹介を超えた、より積極的な浮世絵理解の提示を見出そうとする。改変された図様がさらに「循環」して明治期以降の日本で絵葉書の図様に利用されたことも紹介されており、示唆に富む。

本論文は『芸術の日本』の表紙を対象としているが、言うまでもなくその他の収録図版の典拠同定や分析も望まれる。また、図様改変の意味については、ビングによる『芸術の日本』序論にとどまらず、同誌刊行前後のビングの活動全体、当時の産業芸術や装飾芸術との関わりなど、より広いコンテクストのなかで、検討する必要もあるだろう。フランスで浮世絵の改変・変容が指摘される事例は『芸術の日本』以前にも存在しており、フランス側の浮世絵受容全般の問題と接続することも期待される。本論文は、そうした今後の議論の深化と研究の進展を促す画期的な成果であり、ジャポニスム研究や美術交流史研究に資する論考といえるだろう。

以上により、中村みのり氏に『美術史』論文賞を贈り、その努力と功績を称える。